
Medicine / Poison

宗像竜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M e d i c i n e / P o i s o n

【Nコード】

N 0 1 9 2 N

【作者名】

宗像竜子

【あらすじ】

だから、まだママの所へはあたしは行かない。
一人生き残った『最後の子供』が語る「Medicine」。
…それでも、わたしは、沈まない太陽を夢見た。
子供を一人残す母親の、エゴと祈りの「Poison」。
二つの視点で語られる「生と死」をテーマにした物語です。

M e d i c i n e

世界はまだ、無音じゃない。

風の音がするよ。

葉っぱがさやさや鳴る音もする。

本当に時々だけど、鳥の鳴き声だって。

だから、まだママの所へはあたしは行かない。

だって、まだ……世界が生きてるから。

+ + +

あたしの宝物。

ママから貰った、一錠の薬。

ママの形見になったそれは、辛い時とか苦しい時に飲めば、簡単に楽になれる魔法の薬。

色は赤と白で、つるつるのカプセルに入ってる。

あたしは時々、そつとそれを専用のピルケースから取り出しては、うつとり眺める。

掌に包んで、そつと目を閉じて、ママの顔を思い出す。

ママはお医者さまだった。

覚えている限りじゃ、お仕事をしていた事なんて一度もなかったけど。

部屋の壁に下がっていた、ちよつとよれよれの白衣だけがその名残。

…まあ、そもそも患者がいなかったら、お医者さまだって開店休業に違いないんだけど。今にしてそんな事と思う。

パパは、あたしが生まれてすぐに死んでしまったみたい。

だからあたしは、パパの顔も知らない。

それでも淋しいなんて思わないよ。だって、ママにその分、とっ

ても愛されたから。

愛… ううん、多分それは違うね。

ママ以外の人間を、あたしは知らない。ママ以外の何かを無くした事もない。

だからよくわからないの。

『淋しい』って… どういう感情なのか。

+ + +

あたしが生まれる前から、世界はゆつくりと、でも確実に、人間にとつては不幸な方向に向かって進んでいたようだった。

これは、ママが死んであんまりやる事がなくて退屈で 今ま
でママに絶対に見ては駄目と言われていた端末を覗いてみて知った
事だけだ。

いいよね？ ママはもう怒る事も出来ないのだし……。

それはともかく。

ある時を境に、世界規模で原因不明の病気が発生して猛威を振る
ったらしい。

ママの死因もその病気のようだった。

『らしい』とか『ようだ』って曖昧な言い方しか出来ない。だつ
て、全部終わってしまった事なんだもの。

具体的な説明は、あまりにも難しくってあたしにはわからなかつ
たけど、その病気は苦しんで苦しんで… 最後には必ず命を落とすも
のだって事はわかった。

それは、最後の何ヶ月かのママの姿を思い出させる。

ママはお医者さまだったからか、それとも他に何か理由があつた
のか、最後までその病気と戦った。

あたしにくれた、魔法の薬。

ずっと身につけていたのに、それを自分で飲む事はなかった。

発作が起きる度に自分の部屋に閉じこもって、治まるまで決して
おさ

中に入れようとしてくれなかったけど 外に聞こえてくる怖い
呻き声^{うめ}が、ママの苦しみを表していたから。

どうして、楽にならなかったの？

どうして、この薬を飲まなかったの？

今でもそれは不思議のまま。

もしかしたら聞けば答えてくれたかもしれないけれど、あたしは
結局最後の最後まで尋ねる事が出来なかった。

…何となく、その理由は知ってはいけないような気がしたから。

+ + +

時々、怖い夢を見た。

ママの顔をした悪魔が、あたしの首を締める夢。

怖くて、苦しくて 声が出なくて。

悪魔は何故かとても無表情で、ママの顔なのに何だか別人のよう
だった。

『助けて！ ママ！！』

そう必死に叫ぶ所で目が覚める。

おかしな事に、この夢を見た後、大抵ママはいつもより優しくな
った。

きっと、ママの中の悪魔が外に出て、その分優しくなったんだと
思う。

そう、思わなくちゃいけない。…そう、思いたい。

ドウセ、ヒトリトリノコスクライナラ、コノママイッショ

二……！

だから、悪魔がうわ言のように呟いていた言葉は、この先も一生、あたしの中に閉じ込めておくの。

+ + +

死ぬ間際のママは、ずっとベッドに寝たきりだった。

毎日、少しずつ少しずつ、やせ細っていく。ご飯も身体が受け付けなくて、あたしは毎日、お水をママの口に流し込んだ。

そうなるからには、ほとんど口をきかなくなつて、苦しそうに眠っている事が多かった。

そして、最後の日。

久しぶりにママがあたしに声をかけてくれた。

そうして、あたしに魔法の薬を渡すと、今までの苦しみはなかったかのような安らかな優しい顔で静かに言った。

「もし…苦しくなったり、辛かったり…耐え切れなくらい淋しくなったら、その薬を飲みなさい。そうしたら…楽になれるから」

どういう気持ちでママがそんな事を言ったのか、ママじゃないかわからないけれど。

でも、もうこれでママには会えないんだろうなあと思ったら、あたしはちよつと怖いような気持ちでした。

その気持ちが高んだたのか、今でもわからない。

そうして 結局、ママはそれから日付が変わらない内に死んでしまった。

+ + +

窓の外は、無機質な建物が立ち並ぶ。

そこに誰か他の人がいるのか、あたしは知らない。
あたしは今まで、うちから外に出た事がなかった。

ママが許さなかったというのもあるし あたし自身、ママの
側にいたかったからだ。

でも、今はそのママもいない。

ママは、一度だけ あたしをこう呼んだ。

『最後の子供』

…死の間際のその言葉が、ママの妄想なのか現実なのか、確かめる術があたしにはない。

本当にこの世界には、あたししか生きていないのかな？

そんな風に考える事もたまにはあるけれど、それでもあたしは結局、ママのいない毎日を一人で過ごす。

ちよつとだけ、冒険するような気持ちで庭に出てみたり、今まで知らなかった様々な記録を見たりしながら。

そうだ、この間偶然ママの日記を見つけてしまったっけ。でも、

あれはまたきちんと戻しておこう。

きつとそこに…あたしが知らない全ての答えがあるのだろうから。知ってしまったら…知らずにいる『淋しい』という気持ちに気づいてしまいそうだから。

ごめんね、ママ。

握り締めた掌を開く。人肌に温まったカプセルに軽く口づけて。

ママを殺した病気に、いつかあたしも罹^{かか}るのかもしれない。けれど、あたしも多分この薬は飲まないと思うよ。

何故って 世界はまだ、無音じゃない。

風の音がするよ。

葉っぱがさやさや鳴る音もする。

本当に時々だけど、鳥の鳴き声だって。

だから、まだママの所へはあたしは行かない。

だって、まだ…世界が生きてるから。あたしも…生きて、いたいから。ママのように、最後を自然に迎えるその瞬間まで。

世界はまだ 生きているよ。

Medicine（後書き）

『Medicine』は、学生時代のアルバイト中に冒頭の言葉がひっかかったやいまして、帰宅後にイメージ画を描いてみたら、ざーっと物語が出来てしまいました。

あまり煮詰めると変な風に話が広がりそうだったので、さくさくっと思いつくままに書いてみた、そんな話です。

というか、そもそも一人称の話は大抵何も考えずに書いてる事が多いのですが（おい）

見ての通り「ラストチャイルド」ネタで、妙に救いがない話となっています。

この話を書いた時点では、ママサイドは書く予定はありませんでした。

蛇足な気がしましたが、多分…人によってはこれ以上に読後感はよくないだろうかと。

ところが、とある奇特な方が「作中で語られない背景を知りたいのでママサイドを読んでみたい」とメールを下さいまして。

その結果、書いたのが母サイドの『Poison』となります。

単独でも読めるようにはなっておりますが、よろしければそちらも読んで頂ければと思います。

P o i s o n

世界はその頃、その永い永い歴史の、『黄昏時』に足を踏み入れていた。

もうすぐ 夜が、やって来る。

生き物が活動する昼間の時代から、時すらも止まったような夜の時代へ、ゆつくりと推移して行く。

ひよつとしたら二度と明ける事のない夜に 。

それはもはや避けられないこと。

その訪れを拒む事も、阻む事も出来やしない。こんな小さな、人の手では。

…こんなに時代の進む以前から、人はいつだって最終的には自然という力に勝てなかった。

それは歴史書を紐解く必要すらない、不変の事実。
それでも。

…それでも、わたしは、沈まない太陽を夢見た。

+ + +

「ママ、大丈夫？」

ふと目を開くと、心配そうな娘の顔が見えた。

部屋の中は薄暗い。どうやらもう夕暮れ時のようだ。

「お水、飲む？」

すっかり身体が利かなくなり、自室のベッドに寝たきりになって以来、娘は何処かで学んだ訳でもないのに、甲斐甲斐しくわ

たしの世話を焼いていた。

ずっとベッドサイドで起きるのを待っていたのだろうか？

「…今、何時……？」

嘎^かれてひび割れた声。耳障りなのは、別に寝起きの為だけではない。

もうわたしの身体の中身は、とくに使い物にならなくなっていのだ。

手も、足も、目も、耳も　　口も。

食べ物を受けつけなくなつて、もう数日。そういや、言葉を口に
するのさえ随分久し振りな気がする。

どうにか娘が口元に運んでくれる水を飲み込めるものの、その内、
嚥^{えん}下する事も不可能になるだろう。

それよりも、このかろうじて動いている心臓や、何とか思
考している脳が機能を止めてしまうのが先かもしれない。

…こんな状況なら、自身が医者でなくなつて時間の問題だとわか
る。

そのせいだろうか？

目を開く度に　　開く事が出来る度に、今が何月の何日の、何
時なのかが気になるようになった。

それはもしかすると、わたしが今までの十数年の医師生活で、数
えきれない人間の臨終を看取ってきたせいかもしれない。

「えつとね…今、6時だよ。夕方の」

娘は薄暗い部屋の隅にある時計を見つめながら律儀に答えてくれ
る。

季節は、夏。昼間が長い時期の、遅い夕暮れ時。

…それは、起きる直前まで見ていた夢を思い起こさずにはいられ

なかった。

「…まだ、太陽は沈んでいないのね……」

「うん、まだ明るいよ!」

ぼつりと呟いた言葉に、娘は言葉以上に明るい口調で相槌を打つ。
…その明るさに、胸が詰まる。

この子は、わたしが死んだらどうなってしまうんだろう?
埋葬だって出来ないだろう。大分痩せて軽くなっているとは思いますが、死人の身体は軽いようで意外と重い物だ。動かす事だって出来るかどうか。

…ずっと、わたしが腐りその形を失って行くのを、今みたいに側で見て行くのだろうか?

たった、一人で。

+ + +

それは正に晴天の霹靂^{へきれき}だった。

原因不明の病気が、突如世界各地で発生したのだ。

菌やウイルスによる感染にしては、あまりにも短期間且つ広範囲に広がったそれが、結局なんであつたのか、そして何処で生まれたのか、もはや誰にもわからない。

突然、ヒトの身体の機能が変調を来たしたのだ。

他の動植物にはそのような異変は起こらず、ヒトという種のみで起こった椿事^{ちんじ}。

…内臓が次々に機能を低下、あるいは停止し、最終的には壊死する。

それが何処から始まるのかさえ、人によって異なつた。

ある人は心臓、ある人は胃、ある人は神経　そして、それは決まって激痛を伴う。中にはその苦しみに耐えきれずに、自ら命を

絶つ者も少なくなかったという。

そればかりか…その症状が出た者は、ほぼ100%の確率で生殖能力を失う事が後に判明した。

その結果、まるでヒトという種族の寿命が切れたかのように、数年で世界人口は半分以下に落ち込んだ。

更にその後数年でその半分、その次の一年で計測する事も不可能な程しか、人は生き残らなかった。

…娘は、その病気が発生した翌年に生まれた。

つまりぎりぎり間に合ったという事なのだろうが、今となっては果たして生まれて来た事が良かったのか悪かったのか、わたしにはわからない。

娘が物心着く頃には、もう周辺に生きている人は一人もいなくなっていた。

夫は娘が生まれた少し後に、やはりその病気でこの世を去って、それ以来ずっと二人きりだ。

…娘は、わたし以外の人間を見た事がない。父親の顔すら知らないのだ。今にして、夫の写真を一枚でも残しておけばよかったと思う。

何故全て処分してしまったかと言えば　そのいずれにも、何らかの形で『第三者』が映っているからだ。まだ、人が身近にあふれていた時代の記録。

それを目にする事で、娘が外界を　自分とわたし以外の人間を求めるようになる事が怖かったのだ。

そして同時に、娘は『死』というものに接した事もない。

死ねばそれで終わり　その程度の認識はあるようだが、おそらく免れる事のないわたしの『死』を目の当たりにした時、それは一体どんな影響を及ぼすのか……。

孤独に、耐えられるだろうか。

食料の調達だって出来はしない。備蓄はあっても、いつかは尽きる。

迫りくる己の『死』を前に、この子は一人で立ち向かわねばならない。

もしかしたら、この子は『最後の子供』かもしれないのだ。

わたしの発病は、二年前の冬だった。

全身を貫いた痛み、わたしはついに来るべき時が来たのだと思っ

た。幸か不幸か、わたしの場合、機能不能になった部位は命にすぐに影響する場所ではなかったので、それから今まで生き延びてきたけれど…多分、もうこれ以上は無理だろう。

動けなくなる前に、わたしは何度か娘を殺そうとした。

一人取り残されて幸せだろうか、と思ったのだ。

もし世界に、娘の他に誰かが生きているのだと確証があったら、わたしはそこまで思い詰めずにいられたかもしれない。

わたしが殺す力を持っている内に、『孤独』を知ってしまう前に、終わらせてあげる為にわたしは今まで生き延びたのではないか、とその時は半ば思いこんですらいた。

…それを思い止まったのは、最後にそれを実行に移した際、娘が一瞬、呼吸を止めた時だった。

ふと 思い出したのだ。夫が最後に言い残した言葉を。

『叶うなら…この子には、こんな苦しみを知らずにいて欲しい……』

彼は神経に変調を来し、通常よりも強い苦痛の中で最後を迎えた。

だからこそ、祈らずにいらなかったのだろう。

誰だって、どんな生き物も、痛いのも苦しいのも嫌なはず。痛く

て苦しかったりするからこそ…『死』を恐れる。

もし、誰もが安楽な気持ちで最後を迎える事が出来るのなら、果たして医療はここまで進歩したのだろうか？

…わたしは、今までずっと、人の生命を救う仕事に誇りを抱いてはいなかっただろうか。

なのに…一人残すのが可哀想だからという自分のエゴで、娘に『死の恐怖』と『苦痛』を与えようとした…娘の意志を、無視して娘は首を締めるわたしに力いっぱい抗った。

生きたい、と言葉にはしなくても全身で訴えた。

…ならば…わたしに、いや誰であろうと、この小さな命を奪う権利なんて存在しない…。

+ + +

黄昏時の薄闇の中、めっきり視力の弱くなったわたしの為に、照明をつけずに娘は口元に吸い飲みの吸い口を運ぶ。

そしてほんの一垂らし、湿る程度の水を口に流し込んでくれた。

「…おいしい？」

もう味も匂いもわからないけれど、わたしは頷いた。

…予感が、した。

「…その…引き出しを、開けなさい……」
「え？」

体が動かせないから、目でサイドテーブルを示すと、娘は虚を突かれた顔で目を丸くする。

「引き出し…これ？」

瞬きで肯定すると、娘は不思議そうな顔のまま、その引き出しを開けた。

そこに、わたしが娘にあげる最後のプレゼントが入っている。渡すなら、今しかなかった。

もしまた目を閉じた時、果たして次も目を開く事が出来るか自信がなかったから。

「そこに、ピルケースが…入ってるわね？」

「う、うん…いつもママが首に下げてたのだよね？」

「そう…それ、出してくれる……？」

久し振りにちゃんと話しかけたからだろうか、娘は随分と緊張した様子で言葉に従う。

取り出したペンダント型のピルケースは、薄闇で鈍く銀色に光った。

その中には即効性の高い毒物が入っている。…安楽死用のもので、飲めば意識が薄れて、やがて眠るように死ねるという物だ。

かの病気で生じる痛みには、どんな鎮痛剤もほとんど効かなかった。

一つだけ痛みを抑えるものがあつたものの、あまりに強い作用のせいで身体に負担がかかりすぎる上、二度は使えないもので。

…つまり、結局人がその病の苦痛から逃れるには、『死』しか残されていなかった訳だ。

そこで開発されたのが、この毒薬。開発が間に合つた事自体、それが始めから決まっていた運命のようにわたしには思えてならない。安価で大量に生産されたその毒薬は世界中に広まり…人を苦痛から救う代わりに、その命を次々に奪って言った。人がこれほど早く減つたのは、病だけでなくこの毒薬のせいでもあるだろう。

「これが、どうしたの？ ママ」

「もし…苦しくなったり、辛かったり…耐え切れなくらい、淋しくなったら……」

願わくば。

そんな事にならなければいいと、願わずにはいられない。

「その薬を飲みなさい。そうしたら…楽になれるから」

わたしや夫、その他の人間と同じ苦しみや恐怖を、味わう事などないように。

「…いいわね？」

「うん、わかった」

娘は何かを感じ取ったのか、しばらく迷うような素振りを見せたものの、結局そのピルケースを首にかけた。

…まだ動けた頃のわたしが、そうしていたように。

「それは、お守りだから…なくさないように、ね……？」

「お守り？」

「そう……」

それは、最後に灯った光を消すスイッチ。でも、そのスイッチを入れるかどうかは、持ち主次第。

…その選択を委ねる事が、母親であるわたしに出来る最後の事。どうかこれが、この子の僅かなりの救いとなりますように。

「ママ？ 眠いの？」

「……」

もう、これで…わたしはあなたに何もしてあげる事は出来ない。

「ママ……？」

これが本当に正しい選択か、わたしにはわからないけれど。
でも、これだけは本当の気持ち。

「…さいこの、こども……」

どうか、たった一人きりでも生まれて来た事を悔やまないで。
生まれた事を、嘆かないで。
わたしはもう、行くけれど。

生きて。

いつまでも沈まない、太陽のように。

P o i s s o n (後書き)

こちらが書く予定のなかったはずの、ママサイドの話です

『Medicine』の後書きに書いた読者さまからのメールで自分でも『Medicine』に対する消化不良の思いを抱くようになって、機会があつたらママサイドも書いて見よう！と決意したのは良いのですが。

…結局、実際に書いたのはそれから一年ほど後の事となりました(爆)

それでも、まだ満足はしてないのですが、当時のわたしにはこれが精一杯の文章でした。

今でもこれ以上を書けるかという謎です。

『生まれて来た事を悔やまないで』

この祈りがこの話で書きたかったテーマなのですが、少しでも伝えればと思います。

エゴなんだけど、それでも願わずにはられない想い。

自分が「母親」になるような事があつたら、もっと実感して書けるのかもしれないけど…やっぱりなかなか難しいテーマです(涙)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0192n/>

Medicine / Poison

2010年10月11日02時20分発行